第1節　組織の概要

京都大学構内には、吉田キャンパス北部構内の縄文時代の北白川追分町遺跡や大阪府高槻市の農学部附属農場内にある弥生時代の安満(あま)遺跡など、全国的に見ても古くから著名な遺跡がある。このほか吉田キャンパスのほぼ全域や、和歌山県白浜町の理学部附属瀬戸臨海実験所構内をはじめとする各地の附属施設内にも、先史時代から近世に至る長い歴史を刻んだ埋蔵文化財が多数存在している。こうした文化財をできるだけ保存することは今日の社会の課題であり責務でもある。しかし埋蔵文化財は無数にあり現実の問題としては、現代社会の機能を優先させるべき面も多く、すべてを破壊から守るということは不可能に近い。したがって埋蔵文化財の実態に応じた保存対策を講ずるべきであり、そのための方策として十分な調査・研究を実施することが先決となる。京都市が作成した遺跡地図によると、吉田キャンパスに限ってみても、附属病院構内の西端の一部を除くほぼ全域が、調査を必要とする周知の遺跡として登録されている。

埋蔵文化財研究センターは、こうした学内に残る埋蔵文化財の調査を、建物や施設の建設に当たって、文化財保護法の主旨に則って実施し、その調査成果の出版と、これらを基礎においた研究を進めることを目的として、昭和52(1977)年7月に学内措置として設置された。初代センター長は樋口隆康文学部教授(現：名誉教授)が務め、現在は小野山節文学部教授がその任に当たっている。当センターの人員はいずれも兼任で、文学部(考古学)5名と工学部(建築史)1名の教官と非常勤職員4名で構成されている。その事業は「京

＊扉の写真は、埋蔵文化財研究センター資料室。

都大学埋蔵文化財研究センター要項」に従って進められ、重要事項については運営協議会で審議を行っている。事業の第１の目的は、建築予定地の発掘調査をできるだけ速やかに実施し、建物建設を計画通りに行って、大学の教育研究が円滑に進められる条件を整えることであり、昭和52(1977)年度に設置されて以後、現在までに延べ４万5,000㎡を超える発掘調査を行ってきた。こうした事業に伴って、大学の組織として文化財の調査を継続的に行うことは、それに関する教育の場を提供し、かつこの地域の歴史的復元あるいは調査技術の開発を進めていくうえでの、臨床的な研究の場ともなっている。

埋蔵文化財の遺跡調査は、考古学の分野を中心に実施するものが多数を占めるが、遺跡の堆積や出土する遺物の詳細な研究は、単にこの１分野だけで処理できるようなものではなく、人文科学・自然科学の諸分野との共同研究が要求される。過去の歴史の情報は、こうした調査研究によって効果的に導き出すことができ、それによって文化財調査の意義が発揮できる。京都大学では総合大学として関連分野の協力を得やすい環境にあり、資料処理の質の向上を常に試みている。具体的には考古学の方法によって遺構や出土遺物の分類・計測を基に整理を進めるとともに、国史学、地理学のような人文社会科学だけでなく物理学、地質学、動植物学など自然科学の諸分野からの協力も得て、土器、金属器、木器などの材質分析、年代測定および地形環境の復元など様々な情報の収集を模索している。

第2節　設立に至る経緯

昭和47(1972)年農学部校舎新営のさいに縄文時代の石棒が発見されたのを機に、京都市文化財保護課から大学に対して、埋蔵文化財保存について世間の範となるよう対処してほしいという要望があった。これに対して京都大学は建設工事が行われる当該部局を事務的な窓口として、文学部考古学教室の指導と協力のもとに発掘調査を行ってきた。また昭和48(1973)年7月制定の「京都大学遺跡保存調整委員会規程」を基に同委員会を設置し、建物建設と遺跡保存の調整を図る機能を整備し、さらに昭和50(1975)年3月18日付で制定された「京都大学埋蔵文化財調査室要項」に基づいて埋蔵文化財調査室を設けて調査体制の整備を行った。しかし同調査室の活動に様々な障害が生じるに至り、昭和50年12月に閉室した。埋蔵文化財調査室が担当する予定であった、農学部農林生物学科等研究室実験室新営工事に伴う事前調査が不可能になり、大学の建物新営工事は一時中断した。昭和51(1976)年5月、京都市文化観光局文化財保護課と京都大学施設部および文学部考古学担当教官とが協議を行い、教育研究機関を持つ国の機関であるので、なるべく独自での調査を行うようにとの指導を受けた。これにしたがって、昭和51(1976)年6月に京都大学農学部構内遺跡調査会を設立して農学部校舎建設に伴う事前調査を行った。また昭和51年8月には、和歌山県西牟婁郡白浜町にある理学部附属瀬戸臨海実験所の宿舎新営建物予定地が、瀬戸遺跡に含まれていることがわかり、和歌山県の指導のもとに京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会を設立して発掘調査を実施した。また、京都市内における個々の調査ごとに、調査会をつくることは望ましいことではないという京都市の意向を受けて、両調査会をまとめて京都大学構内遺跡調査会を設置し、これを母

体にして学内の建物建設に伴う発掘調査を進めることになった。一方、大学本来の研究や遺跡保存のための活動を充実させるため、昭和52(1977)年7月に京都大学埋蔵文化財研究センターが発足した。

その後、学内の建物建設に伴う発掘調査は、埋蔵文化財研究センターの指導のもとに構内遺跡調査会を母体として進めてきたが、平成4(1992)年3月をもって同会は解散することとなった。以後、学内の発掘調査および出土資料の整理、成果の報告・出版を含めてすべて埋蔵文化財研究センターが行うこととなり今日に至っている。

第３節　調査の成果と研究

今日までに実施した建物建設に伴う発掘調査は、試掘・立ち会い調査を含めると約220件におよぶ。その中で規模の大きなもののみを選んで示したのが表43-１と図43-１である。こうした構内の遺跡調査とそれに対する研究の結果、北白川地域の先史時代から近世に至る長い歴史の一面を明らかにする成果が得られており、その概要を見ておくことにする。以下の文中の◯内の数字は、表43-１と図43-１の発掘調査の地点を示す。

縄文時代の遺跡としては、北部構内のほぼ全域が大正時代以来、北白川追分町遺跡として、全国的に見ても著名な遺跡として知られていた。北白川の扇状地の上に営まれた当時の人々の生活の痕跡を残す大規模な遺跡群の一部に当たり、周辺には北白川小学校から白川通りにかけて北白川別当町遺跡が、また人文科学研究所別館の東には北白川小倉町遺跡がある。農学部本館北側⑤で縄文時代中期の住居跡２棟が、また理学部附属植物園の西端部⑪ではこの時期の配石墓(写真43-１)が発見されている。さらに理学部物理学科校舎③およびプラズマ実験研究棟④の新営のさいの調査で発見された森林跡は、これらの住居や墓を残した人々の活動の場となっていたことが明らかになっている。そこでは土器や石器のほかに、食糧の対象となったと考えられる多量のトチノキやクルミなどの木の実や種子類、および多種類の昆虫類や木材も出土し、花粉分析を含めた関連

写真43-１　配　石　墓

分野の協力を得て、古植生の復元を試みた。また縄文時代晩期の層では多数の動物の足跡に混じって人の足跡が発見され、当時の人々の活動の場での動植物とのかかわりを知る貴重な資料を得ている。

弥生時代の遺構の主な２つの例をあげると、北部構内の理学部合同建物建設に伴う調査⑫で発見された弥生中期の方形周溝墓と、人間・環境学研究科校舎新営に伴う調査㉘での弥生前期の水田跡がある。前者は弥生時代の墓の１つの典型的な形態を持つもので、京都盆地北部では初めての発見であった。また後者は、日本へ稲作技術が導入された直後のもので、京都府下では最古に当たる時期の水田である。約2,000㎡にわたって発見された遺構には、小区画に畦で区切られた状況が極めてよく残り、当時の水田の構造を復元する貴重な資料となっている。

古墳時代から奈良時代にかけては、総合人間学部構内㉗・㉘で小規模な古墳が、また本部構内㉔では奈良時代の竪穴住居跡が発見されているが資料は断片的である。平安時代には、この鴨東の地が再び人々の活動の場として活発に利用されたことを示すかのように、残された遺構や遺物は増加する。総合人間学部構内では吉田食堂㉗および人間‐環境学研究科校舎㉘の建設に伴った調査で、計７基の梵鐘鋳造遺構が発見されている。そこでは梵鐘に要する青銅を加工する溶解炉の遺構や、梵鐘の鋳造に用いられた多数の鋳型を伴って発見された内型の基礎となる定盤の遺構(写真43-２)、および内型と外型を固定するための井桁状に組んだ掛木の痕跡のある遺構などが明らかになり、10世紀初め頃の梵鐘の製造技術やその工程を具体的に知る貴重な資料となっている。

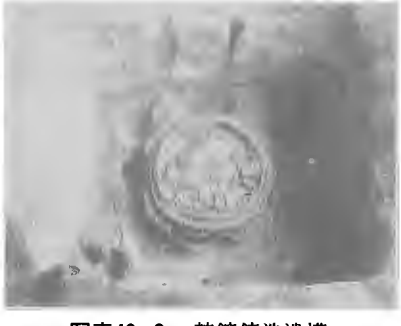


写真43-２　梵鐘鋳造遺構

鎌倉時代に入ると、北部構内⑫で火葬塚とよばれる遺構が残されている(写真43-３)。大小２重の方形の溝をめぐらせて、中央に方形台状の

表43-1　構内の主な発掘調査

地点	調査地区	調査面積	主な遺構	主な遺物	調査年度
1	農学部校舎	624m²	古代・近世溝 建物跡	弥生土器、土師器 須恵器	昭和55年
2	基礎物理学研究所	1,228m²	中世・近世道路 古代溝、土器溜	縄文土器、土師器 緑釉・灰釉陶器 黒色土器	平成5年
3	理学部校舎	650m²	縄文晩期埋没林	縄文土器	昭和53年
4	理学部校舎	737m²	縄文晩期埋没林	縄文土器、土師器 緑釉陶器	昭和58年
5	実験排水施設	787m²	縄文住居跡 中世土坑	縄文土器、土師器	昭和57年
6	農学部校舎	800m²		縄文土器	昭和49年
7	農学部校舎	800m²		縄文土器	昭和49年
8	農学部校舎	900m²	縄文晩期土壙墓	縄文土器、土師器 瓦	昭和51年
9	農学部校舎	803m²	中世・近世水田、溝	土師器、陶磁器、瓦	昭和57年
10	農学部校舎	618m²	土坑、河川	縄文土器、土師器 須恵器	昭和62年
11	理学部植物園	400m²	縄文後期甕棺 ・配石遺構	縄文土器	昭和48年
12	理学部校舎	500m²	弥生中期方形周溝墓 中世火葬塚	弥生土器 土師器、瓦	昭和53年
13	実験排水施設	272m²	古代建物、近世瓦溜	土師器、陶磁器、瓦	昭和56年
14	理学部校舎	600m²		弥生土器、石器	昭和47年
15	理学部校舎	1,323m²	古代溝、中世土坑 噴砂	土師器、陶磁器	平成5年
16	理学部校舎	1,433m²	古代埋納遺構 土器溜、近世壕 噴砂	土師器、陶磁器 桟瓦、銭貨	平成4年
17	工学部校舎	1,120m²	近世白川道 中世土器溜 井戸、建物	土師器、陶磁器 瓦、弥生銅鏃 石器	昭和55年
18	工学部校舎	500m²	近世白川道	土師器、陶磁器 銭貨	昭和53年
19	工学部校舎	1,604m²	中世土坑 近世道路	縄文土器、土師器 陶磁器	昭和62年
20	文学部校舎	929m²	中世集石土坑・井戸	土師器、青磁、瓦	平成5年
21	工学部校舎	1,480m²	弥生河川 中世砂取り穴	土師器、陶磁器	平成4年

地点	調査地区	調査面積	主な遺構	主な遺物	調査年度
22	工学部校舎	1,074㎡	弥生河川 中世土器溜	弥生土器、土師器 石器	平成5年
23	工学部校舎	890㎡	中世壕、建物	土師器、須恵器 瓦器	昭和57年
24	実験排水施設	400㎡	奈良後期竪穴住居 中世土壙墓 近世道路	土師器、須恵器 白磁	昭和54年
25	教養部校舎	599㎡	中世・近世溝	土師器、近世陶磁器	昭和61年
26	教養部校舎	750㎡		土師器、陶磁器、瓦	昭和48年
27	吉田食堂	1,716㎡	古墳 古代梵鐘鋳造遺構 中世門、溝、墓	縄文・弥生土器 土師器、須恵器 鋳型、溶解炉	昭和56年
28	人間・環境学 研究科校舎	3,800㎡	弥生水田、古墳 古代梵鐘鋳造遺構	縄文・弥生土器 土師器、陶磁器 鋳型	平成5年
29	医学部校舎	2,776㎡	中世井戸、溝 土器溜	土師器、陶磁器 瓦、石器	昭和54年
30	放射線生物 研究センター	963㎡	中世井戸、土取り穴	土師器、須恵器 瓦器	昭和58年
31	放射線同位元素 総合センター	331㎡	近世土取り穴	土師器 陶磁器	昭和61年
32	医学部校舎	1,200㎡	中世溝、土器溜 井戸	土師器、陶磁器、瓦	昭和52年
33	医学部校舎	1,920㎡	中世井戸、土取り穴 中世梵鐘鋳造遺構	土師器、瓦器、鋳型	昭和59年
34	医学部校舎	1,950㎡	中世建物、土器溜 溝、井戸	土師器、瓦器 陶磁器、漆器	平成4年
35	附属病院研究棟	3,000㎡	井戸、近世土取り穴	土師器、近世陶磁器 鋳型	昭和60年
36	附属病院病棟	4,295㎡	井戸、近世土取り穴	土師器、近世陶磁器	昭和60年
37	附属病院病棟	2,495㎡	中世土坑・溝	土師器、瓦、陶磁器	昭和63年
38	附属病院研究棟	863㎡	近世池、井戸、野壷	縄文土器、蓮月焼	昭和59年
39	医療技術短大校舎	1,028㎡	中世井戸、溝、土坑	土師器、瓦器、白磁	昭和57年
40	医療技術短大校舎	2,200㎡	古代・中世溝、池 土器溜	土師器、陶磁器、瓦	昭和51年
41	医療技術短大校舎	800㎡	古代護岸、中世溝 井戸	土師器、陶磁器、瓦	昭和52年
42	ウイルス研究所	805㎡	近世井戸・野壺 ・柵列	土師器、陶磁器、瓦	平成元年
43	ウイルス研究所	599㎡	近世道路・溝・野壺 ・井戸	土師器、陶磁器、瓦	昭和63年

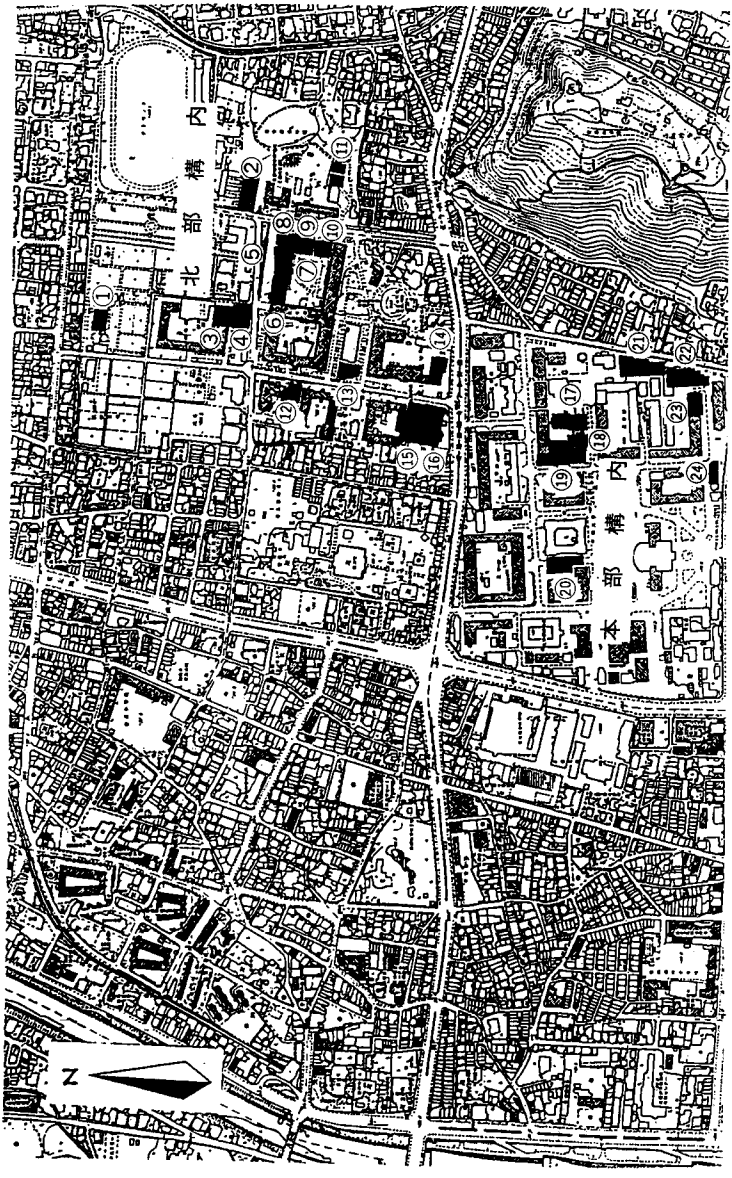
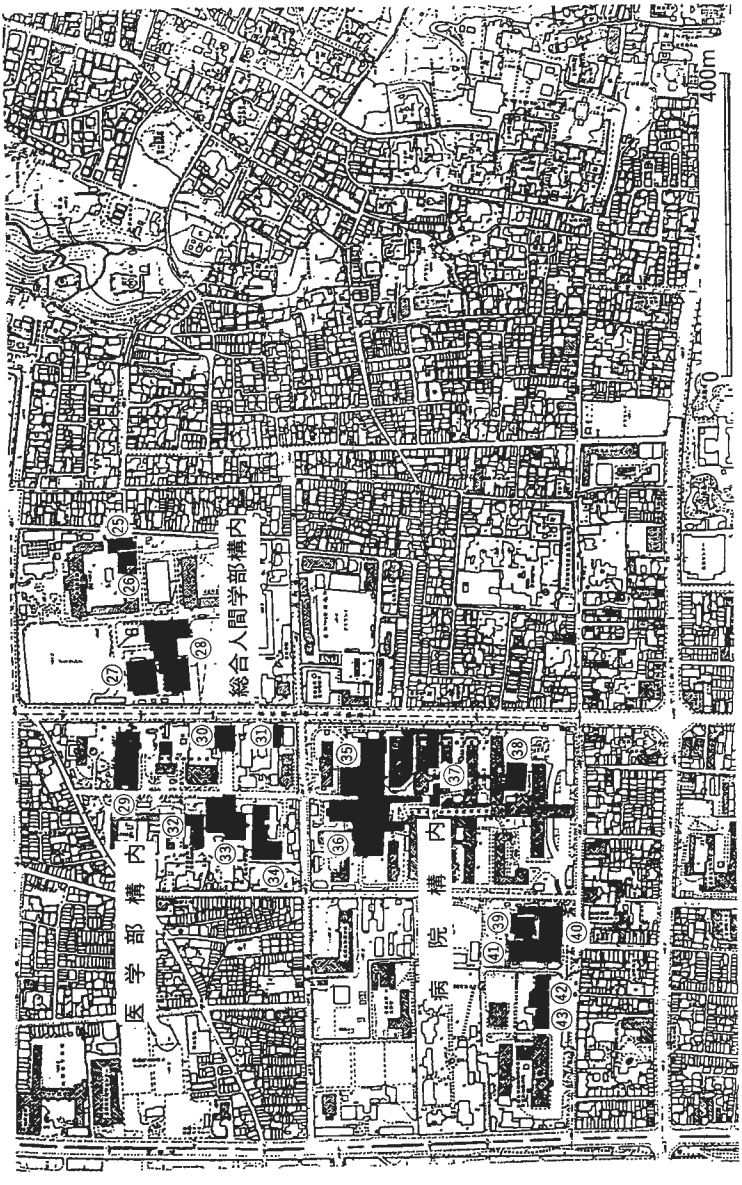


図43-1　構内の主


400m
総合人間学部構内
医学部構内
病院構内
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43

な発掘調査の位置

塚を築いた構造を持ち、当時の上級階層の人々の葬送の儀式を執り行った場所で、西日本では数少ない発見例の１つである。

写真43-３　火　葬　塚

また未発見であるが、吉田キャンパス内に残っている可能性が高いものとして福勝院の遺構があげられる。兵部卿平信範が記した日記『兵範記』の仁平２(1152)年８月28日の条には、鳥羽法皇の皇后高陽院泰子が仁平元(1151)年に創建した福勝院の建物の配置が、図面として描かれている。また泰子の葬送に当たって近衛末を東に向かい福勝院の南門を入るという同じ『兵範記』の記事に基づいたこれまでの建築史の研究から、その位置が京都大学総合人間学部構内の南部付近であろうという推定がなされている。さらに、藤原定家の日記で治承４(1180)年から嘉禎元(1235)年の間の記事が収められた『明月記』によると、この寺は鎌倉時代まで存在していたようである。医学部構内の南半㉛や病院構内の北東部㉟～㊲の発掘調査では、青銅製六器とその受皿を鋳造した鋳型や、祭祀に関わる人面や蓮華文を墨書した土器が多数出土している。このような資料はこの一帯に福勝院に関連する施設が存在したことを示していると考えることができ、『兵範記』の図面に描かれた寺の中心部に見られる九体阿弥陀堂や護摩堂などの遺構も、この周辺に存在する可能性があり、調査に当たって留意しているところである。

近世になると豊富な文献資料が存在する一方で、この北白川地域の文化財も種々の資料がある。現在までの調査からその内容が非常によくわかるものを２例あげると、本部構内に残る白川道と、北部構内で明らかになった幕末の土佐藩の藩邸跡がある。白川道は古代以来の文献に、志賀ノ山越、今道越、山中越、白川道などの名称で表れ、京と近江を結ぶ重要なルートとして頻繁に利用されたものである。その痕跡は今日も道路として残っているが、

学内では、文久2(1862)年～明治3(1870)年の間徳川尾張藩京屋敷が吉田の地に置かれ、明治20(1887)年にはその跡地(現在本部構内)に第三高等中学校が創設されたため、その一部が断ち切られたものである。本部構内ではこの白川道のうち中世と近世の遺構がいくつかの調査地点⑰・⑱で明らかになっている(写真43-4)。道路面には車の通行によってできた幾筋もの轍が残り、その両側には排水を意図した溝や土留めの柵跡が付属し、さらに道に沿って野壺が並び、道路の構造とともに当時周辺に畑地が広がる光景に関する詳細な情報が得られている。この道路の遺構は本部構内の北東端から本部棟北側を通り、東一条交差点の北東端を通って、さらにその西へ続いている。医学部北端を通って荒神橋の北へ向かう現在の道路は、この白川道の遺構の延長に当たるものである。この道の起源は文献の上から平安時代にさかのぼるが、鎌倉～室町時代には北陸路からの物資は琵琶湖を利用して坂本へ陸揚げされるようになり、またその後も、安土からのあるいは東海道からの京都への捷路として、この道路は頻繁に利用されたものである。

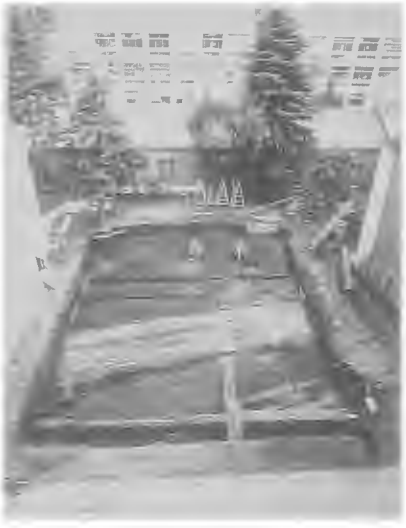


写真43-4　白　川　道

また幕末の遺構では、北部構内動植物学科校舎新営に伴う調査⑯で明らかになった土佐藩邸跡がある。そこでは今出川通りに面して、通りにほぼ平行な堀が発見された(写真43-5)。慶応4(1868)年刊の竹原好兵衛版の『改正京町御絵図細見大成』には、後二条天皇陵と百万遍知恩寺の間に土佐藩の藩邸が描かれており、これが土佐藩邸の南を限る堀であることが明らかになった。東西の長さは調査区内を越えており不明であるが、一部に途切れた箇所があり南から入って門へ通じる土橋と考えられるものが付属している。この

堀の中から発見された多数の瓦には、当時の土佐藩の瓦製造元の屋号である「アキ文」「安喜寅」などを刻印したものが多く見られる。各藩は本来京都の市街地に藩邸を設けていたが、幕末の動乱期に増員された多数の藩士の駐屯のために京近郊にも藩邸を設置した。北部構内の土佐藩邸や本部構内北半部に推定されている尾張藩邸などは、このような経緯から設けられたものである。

写真43-5　土佐藩邸堀

以上のようなこれまでの発掘調査の中で、西日本、あるいは全国的に見ても文化財として貴重な資料となり得る遺構については、関係部局と協議を行い、現地で保存、あるいは隣接地へ移築して保存した。理学部ノートバイオトロン実験棟建設時に発見された縄文時代の配石墓は、隣接する理学部植物園内へ移築復元し、また、理学部附属瀬戸臨海実験所構内発見の奈良・平安時代の土器製塩のために用いられた炉も同様の方法で保存している。一方北部構内の縄文時代中期の住居跡、弥生時代中期の方形周溝墓、鎌倉時代初期の火葬塚、本部構内の奈良時代の竪穴住居跡、および総合人間学部構内の平安時代の梵鐘鋳造遺構については、現地に埋め戻して保存し、それぞれに説明を記した解説板を設置している。

第4節　研究活動の現状

発掘調査によって蓄積された資料を基にして、次のようなテーマを中心に研究を進めている。

(1)　北部構内の北白川追分町遺跡の調査の成果を基礎に置いた、西日本縄文土器の編年の検討、および京都盆地を事例にした縄文時代集落の構造とその歴史的変化の復元研究を行っている。

(2)　構内遺跡出土の先史時代から中世に至る間の土器や陶器の材質を、鉱物や元素の面から分析し、製作地の同定をする方法を用いて、西日本各地の遺跡出土の先史時代の土器や、古代・中世の陶器生産地の窯跡出土資料との材質を比較検討し、これらの移動や流通に関する情報を蓄積している。

(3)　総合人間学部構内発見の平安時代の梵鐘鋳造遺構は、鋳型だけでなく溶解炉の遺構も伴っており、これらの資料を中心に当時の手工業生産における鋳造技術の復元に関する研究を進めている。

(4)　学内に残る遺跡には学術的価値の高いものも少なくなく、それらの保存のための方法や技術の開発を進めている。また、発掘調査時の情報をコンピューター処理して調査の合理化を図るとともに、整理調査に当たって画像処理の方法による多量の情報整理を行うための開発をも進めている。

発掘調査による成果の報告や研究の公表は、『京都大学構内遺跡調査研究年報』として昭和52(1977)年から平成4(1992)年まで毎年1冊刊行し、また重要な遺跡についてはさらに詳細な分析を加えて、『京都大学埋蔵文化財調査報告』として昭和53(1978)年、56(1981)年、60(1985)年と平成3(1991)年に各1冊、計4冊を刊行している。また、これらの資料を中心とした研究成果は前述の年報に紀要編を設けて発表している。その他個々の発掘調査の終

了時には、学内の教職員学生および一般市民を対象として、現地でその成果の説明会を行っている。

過去約20年間にわたって蓄積してきた調査資料は、全国の調査機関や研究者から調査研究や見学の希望が多く、常に資料の提供ができるよう配慮している。昭和63(1988)年から本部構内の尊攘堂を当センター資料室として利用できることになり、これら多数の資料を保管すると同時に展示をして、学内、学外の人々が観覧できる場を設けることができるようになった。尊攘堂は、品川弥二郎によって保管されていた吉田松陰の遺墨類を、京都帝国大学が管理することとなったのを機に、明治36(1903)年現在の教育学部の南側に当たる位置に建築された建物であり、昭和14(1939)年に附属図書館新築のため、本部構内西門の南側に移築された。尊攘堂建設に至った経緯や建築様式については、『京大広報』No.112 と『京都大学建築八十年の歩み』に詳しく紹介されている。改修に当たっては、資料室としての活動に必要な照明や給排水施設を新たに設けたものの、歴史的建物としての価値を損なわぬよう、外装および天井の円形浮き彫り装飾や鉄製シャンデリアなど、建物全体の外観や装飾などは従前のままに残して、破損部の修理と補強にとどめている。

資料室のうち主室の広間には、過去の調査による出土品の主なものを展示し(写真43-6)、4つの小室は、関連資料の保管や写真用暗室などに利用できるようになっている。展示資料には、北部構内で発見された縄文時代の甕棺墓に用いられた土器、和歌山県の理学部附属瀬戸臨海実験所構内で出土した、古墳時代から奈良時代の塩作りに使った土器、あるいは病院構内で出土した江戸時代の歌人大田垣蓮月の手になる陶器類などがある。また同時に、調査に当たって関連諸分野の協力を求めて行った、出土木材の樹種同定や地磁気によ

写真43-6　資　料　室

る年代測定の紹介のほか、コンピューターによる調査データの解析、土器の作られた場所を同定する材質分析、重要遺構の保存修景方法やその実施例など、当センターで開発、研究を行っている内容を紹介するコーナーも設けている。

このように埋蔵文化財研究センターでは、個々の調査に基づいて研究方法の開発や発掘調査への応用を試みており、調査・計測の方法だけでなく遺物の分析や遺構の保存・修景など総合的な調査研究を進め、京都大学構内に残る埋蔵文化財の有効な活用を目指している。